

bunka@nagasaki-np.co.jp

1月22日(日) 先勝

(旧暦1月1日)

総合案内(095)844-2111
報道部(095)846-9240
地域ソリューション部
(095)844-4874



発行所
長崎新聞社
長崎市茂里町3-1 〒852-8601

まずは「処分」の視点で選別



押し入れの衣装ケースには洋服がいっぱい。「何とかしなければ」と話す横田さん
＝長崎市田手原町

もっと
身軽に
整理術あれこれ

衣類

「数え切れないくらい服がある。押し入れは衣装ケースでいっぱい」。長崎市田手原町の横田裕子さん(65)は88歳の母親と2人暮らし。もともと服に興味があり、若い頃から買い集めてきた服の収納場所にはいつも困っていた。昨年3月まで約40年間、看護師として働いた。気分転換になればと服を購入すること

もあつた。「良いものを長く着たい」とブランド品にも手を伸ばした。編み物が30年来の趣味で、洋裁も昨年習い始めた。自分で作ったニットや服も数多い。洋服だんすに入りきれないものは衣装ケースに入れ、押し入れには約30個が並ぶ。それでも別の部屋にまで衣類があふれている。

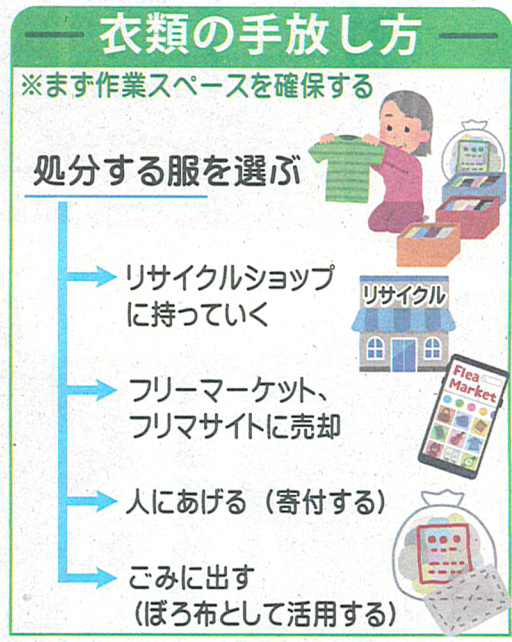
実は5年くらい前に服の断捨離を決意。友人らに服を譲ることから始め、これまでに4分の1は減った。でもまだまだ。インターネットのリマアプリに手編みのセーターなどを出品したが反応は鈍かった。唯一手応えのあつた友人宅でのフリーマーケットには今後も出品するつもり。

リサイクルで社会貢献も

「いつかこの家を引っ越す時が来るかもしれない。それまでに服を何とかしなければ」とは思うが、状態が良く愛着のある服は誰かに着てほしい。ごみとして捨てる気にはなれないという。

長崎新聞社が昨年行った「老活」「終活」アンケートによると、回答者114人の2割超が衣類の断捨離に取り組んでおり、「着なくなった服は少しずつごみに出している」という人も複数いた。衣類など不用品の買い取りや販売を行うリサイクルショップの「フリーマーケットA(CB(アシベ))」時津店は、残す服を選ぶというより、まず処分する服を選ぶことが大切とアドバイスする。

業界では「逃がし場所」と呼ぶ別室などのスペースを確保すると作業しやすい。服の染みや毛玉などをチェックし、状態の悪いものはできるだけ捨て量を減らしていくことを勧める。物を大事にする気持ちや思い入れが分別の妨げになることもあるという。「1人で作業せず、本人以外



古着 de ワクチン 運営事務局は「捨ててしまえばごみとなるが、送るだけでたくさん社会貢献につながる。ネットや電話から申し込み、利用も簡単」と話している。同事務局(電0120・206・2275)。

|| 次回は29日に掲載します || (中村修二)